



# 宮城県におけるフタオビコヤガの発生生態

宮城県古川農業試験場 よこ横 ぼり堀 あ垂 や弥\*

## はじめに

フタオビコヤガ (イネアオムシ) *Naranga aenescens* は、幼虫がイネの葉を加害する重要害虫の一種であり、防除対策として、育苗箱施用剤による防除と第2~3世代幼虫を対象とした本田防除が挙げられる。しかし、本種の発生時期は年次変動が大きいいため、本田において薬剤散布を実施する場合、防除適期の判断が必要であり、予察精度の向上が重要な課題である。

本種の発生世代数については、北海道、秋田、山形では年3世代と報告されている (木幡・井上, 1964; 岸野・佐藤, 1975; 遠藤ら, 1989)。宮城県では、2011~12年に行った調査により、水田内で3世代を経過することが確認されているが (相花ら, 2013)、その後も調査を継続し、発生消長とその年次変動について検討した。成虫の発生調査にはフェロモントラップと予察灯を用いたが、一部の世代で誘殺盛期が判然としなかったことから、有効積算温度により各世代の成虫の発生時期の予測を試みた。

また、少なくとも2014~18年は9月にフェロモントラップや予察灯で成虫の誘殺が確認されているが、同時期の水田内では幼虫の発生がほとんど認められていない。このことから、本種は稲わらの中で蛹越冬する (平井, 2003) とされるが、9月に発生する幼虫はイネ以外の植物を寄主としていると推測された。そこで、水田周辺のイネ科植物を探索したところ、アシカキ *Leersia japonica* 群落において幼虫の発生を確認したことから、その発生状況についても報告する。なお、本報告の詳細は横堀ら (2019) を参照いただきたい。

## I 成虫と幼虫の発生消長

成虫と幼虫の発生消長を明らかにするため、2011~18

年に宮城県古川農業試験場 (宮城県大崎市、以下「試験場」) 内で、成虫はフェロモントラップと予察灯を使用して、幼虫は補虫網によるすくい取りにより調査を行った。フェロモントラップは、SEトラップ (サンケイ化学株式会社) を用い、白色粘着板の中央に誘引源としてフタオビコヤガ用ルアー (サンケイ化学株式会社) を取り付け、水田畦畔上に地上高50 cmで設置した。粘着板は原則7日ごと、ルアーは約1か月ごとに交換した。雄成虫の誘殺数は設置日数で割って日別の値を求め、それを半旬ごとに集計した。予察灯 (乾式、光源: 60 W 白熱電球) は水田に隣接した圃場に設置し、毎日誘殺された成虫数を計数し、半旬ごとにデータをまとめた。幼虫の発生消長は、水田内 (品種「ひとめぼれ」、移植5月中旬、面積2 a) で半旬ごとに捕虫網 (口径36 cm, 柄の長さ100 cm) による10往復20回振りすくい取りを行い、幼虫数を数えた。なお、2013~18年は若、中、老齢別に幼虫数を数えた。殺虫剤は無散布とし、その他の栽培管理は慣行に準じて行った。各年次の調査期間などを表-1に示した。

2011~18年におけるフタオビコヤガの成虫と幼虫の発生消長を図-1に示した。フェロモントラップと予察灯における誘殺消長を比較すると、フェロモントラップでは4月中旬~5月下旬に越冬世代成虫が誘殺されていたが、予察灯ではほとんど誘殺がなかった。これは、5月の最低気温が5~15℃と低く、夜間における飛翔活動が抑制されるため、予察灯では誘殺が認められないが (木幡・井上, 1964; 岸野・佐藤, 1975; 遠藤ら, 1989)、気温が高い昼間に活動している成虫を捉えているフェロモントラップでは誘殺されたためと考えられた。

フェロモントラップと予察灯の誘殺盛期は第1世代以降、おおむね一致しており、第1世代が6月第4半旬~7月第2半旬、第2世代が7月第3~6半旬、第3世代が8月第4~6半旬であった。

幼虫の発生消長を見ると、第1世代は2012~15年のみ確認され、その発生時期は6月中旬であった。発生盛期は、第2世代が7月第2~5半旬、第3世代が8月第4半旬であった。各世代のすくいとり虫数を比較すると、

Biology of Rice Green Caterpillar, *Naranga aenescens* in Miyagi Prefecture. By Aya YOKOBORI

(キーワード: フタオビコヤガ, 成虫発生時期, 有効積算温度, アシカキ, 越冬)

\*現所属: 宮城県北部地方振興事務所栗原地域事務所